

人が、街が失われた2011年3月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

あの日から、
未来へ

南相馬市立総合病院
内科医

坪倉正治氏



震災当時生まれていない子たちへ

震災から6年と8カ月が経った。仕事の縁から放射線について、学校で生徒に授業をする機会を定期的にいただく。毎年お伺いする学校もあれば、3年ごと1回だけのところや、福島県内・県外などさまざまな場所からお声がけいただく。生徒の前で白衣を着て聴診器を持ち、いつも使う小話をして限られた時間の中で何とか気を引き、理解度を高めようと「もがく」わけだが、放射線および今回の原発事故のどの部分をどのような方向から教えるかは、いつも本当に難しい。

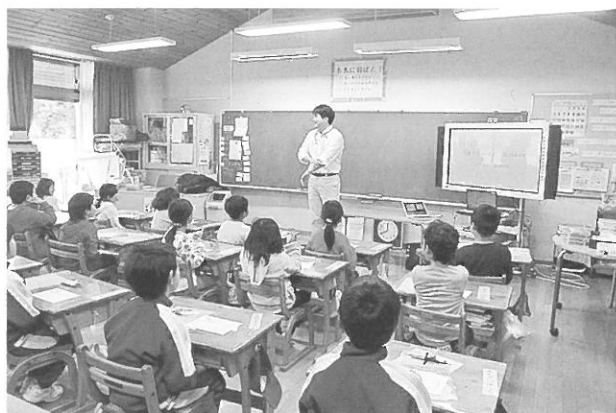
単に放射線といえば物理の問題かもしれないが、環境を汚染することを考えればそれは健康の問題となり、生活の問題、社会の問題となる。もう少し大きな話をすれば、エネルギーの話でもあり、歴史の話でもある。健康の問題として教えようとしても、内部被ばくは全体として非常に低く、ごく一部の汚染食品を継続的に食べれば、比較として少しの内部被ばくをすることがあるという事象があった場合、「全体は非常に低い→問題ない」と教えるか、ごく一部の食品は「汚染があり得る→いまだに問題がある」と伝えるか、先生によって考え方や要望も違う。

私自身は、子どもが被ばくや汚染によって何かしらの尊厳を奪われたり、可能性を狭められたりすることがあってはならない。そのための知識を持ってほしいとい

うことが、放射線教育の目指す最重要課題であると考えている。そのため自然と、その方向に準じた話し方になる。その方向の上では、放射線の細かい定義の正確性や原子力の物理学としての面白さは、正直なところどうでも良く、これまでの住民の被ばく量が非常に低いとか、もともと放射線は環境中にも存在し、被ばくがゼロという状況はあり得ないということを伝えることが中心となる。

先日は福島県川内村の小学校で放射線の授業をした。川内村は原発から南西に20キロメートルあたりにある。一時的に全村避難となったが、早期に避難指示は解除され、徐々に帰村される人や新しく住んでいる人もいて、現在生徒数は45人だ。毎年お声がけいただいているおかげで、生徒たちとほとんどが顔なじみになった。何人かはいつも使うギャグを覚えていてくれて、それにうまく乗ってくれてほけてさえくれる。おかげで授業もスムーズに進められ、少しずつ知識が定着してくれることを肌で感じ、その先に一步踏み込んだ話をする事ができる。その一方で、今の1年生は震災当時生まれていない子もいる。震災とか避難とか、原発という言葉を使っても全くぴんとこず、6年半以上前こんなことがあったというところから話さないと思われない部分もあり、時の流れを感じる。震災から6年半でこんな状況であれば、10年後や20年後の小中学校の授業はどんな感じになっているのだろうか。

こんな状況だからこそ、授業で何を伝えるか、基礎や標準的な内容がどうあるべきか、もう1度仕切り直して議論されるべきだろうと思っている。何かと厄介者扱いされる放射線だが、生徒のみんなが元気いっぱい、放射線を教える側が元気をもらおう。明日も頑張らないとという気持ちにさせられる。ここで大人が踏ん張らなければいけない。そんなことを思いながら今日も淡々と授業を続けている。



放射線の授業を通じ、子どもたちから元気をもらう